

学校図書館報

赤 土

第57号

編集・発行

群馬県立館林高等学校
学校図書館・図書委員会
印刷／東京広告株式会社「学校図書館に
ついて」

校長 高張 浩一

令和二年度学校図書館報「赤土」の発行に当たり、原稿執筆など御協力くださいました関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響が私たちの生活を大きく変化させました。学校も長期の臨時休業や感染防止対策の徹底など、現在も様々な制約のある中で教育活動を実施しています。社会に目を向けても三密の防止、テレワークの推進、外出の自粛など人と接する機会を減らし感染拡大を防ぐような生活となっていました。

自宅で過ごす時間が長くなるため、その時間を読書に使うという人も多かったようです。実際、このコロナ禍でアルペール・カミュの『ペスト』が多くの人に読まれました。また、ビジネス書の売り上げも昨年と比較して一割程度伸びており、増えた在宅時間を学びに使うという意識の高まりが要因ではないかと報道されていました。

このような状況において、生徒の皆さんも自宅で読書を楽しむ時間が増えたのではないかと考え、本校の図書館の貸出件数を調べてみました。図書館では一年生の図書館オリエンテーション、新書読破月間など

のイベントを実施しており、昨年度と今年度では実施時期なども異なるために単純な比較ができませんが、昨年度の四月から十月までの七ヶ月間で貸出数二千二百九十八冊、今年度は四月、五月は臨時休業のため貸し出しはありませんでしたので、六月から十月までの五ヶ月間で貸出数二千三百八十九冊でした。今年度の五ヶ月間での貸出数が昨年度の七ヶ月間の貸出数よりも百冊程度多かったようです。

ところで、私は平成八年度から平成十二年度までの五年間、この館林高校で理科の教員として勤務していました。先日、図書館のある本の裏表紙の中側にあった貸出カードを見ますと、貸出カードに私の名前が書いてありました。二十年前に本校の図書館で借りて読んだ本が今も大切に書架上に置いてあることにちょっとした感動をおぼえました。

今は貸し出しのときにはバーコードを読み取りコンピュータに貸し出しの記録がデジタルデータとして保存されます。したがって、本の裏表紙の中側に貸出カードはありません。以前は、貸し出しの記録はカードに記載するアナログ的な方法でした。もし、二十年

前からデジタル的に貸出記録がされていたら、今回のような本との出会いはなかったと思います。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大により様々なところでデジタル化が推進されていますが、場合によってはアナログも捨て難い良さをもっていると感じました。

この図書館報「赤土」には図書部の一年間の活動が記録されています。その活動の中に図書館主催の小講演会があります。今年度は国語科の中澤先生の講演でした。過去の「赤土」を見ていたら、平成十三年三月発行の「赤土」に私の小講演会を紹介する記事をみつけました。私は平成十二年九月に教育視察のためオランダへ行きました。後日、その視察の内容を「オランダ日記」と題して生徒や職員に話しました。その講演会で話した内容が「赤土」に記載されており、改めて読んでみると懐かしい記憶がよみがえってきました。

オランダでの食事、風呂やトイレ、街の風景などが記されていて、視察した学校の話は当時の生徒たちにはあまり印象に残らなかったようです。

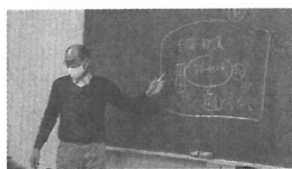
このように、本校の図書館は私にとって大変縁のある場所です。今年度も何冊か本を借りて読みました。学校図書館の良い点の一つは、ベストセラー本も待たずにすぐに借りられる点です。市町村立の図書館ではベストセラー本はたくさん

の予約が入っていて、借りるのに数ヶ月かかるような場合もあります。

今年度、私が図書館で借りた本は月に二冊程度でした。その中で印象に残っている本は、中国人作家の劉慈欣が書いた「三体」シリーズです。この本のジャンルはSFで、最終巻の「三体Ⅲ」はまだ日本語訳が出版されていませんので、これから読むのを楽しみにしています。テーマは異星文明との接触です。タイトル「三体」は、恒星が三つある惑星系の異星文明という設定からきているようです。物理の力学では、物体が二つの二体問題はその二つの物体の運動を厳密に解くことができますが、そこにもう一つの物体が加わり三体問題に

なると厳密には解くことができません。このような物理的な背景も物語の中に登場します。スケールの大きな作品で世界的に売れている本です。臨時休業中には福岡伸一さんの「生物と無生物のあいだ」を借りて再読しました。臨時休業中の校長通信におすすり本として紹介しました。

図書館には、教科の学習に役立つ本や気楽に楽しめる本など幅広いジャンルの本があります。そして司書の玉井さんが、生徒の皆さんが興味をもてるように本の置き方にも工夫をしてくれています。是非、図書館に足を運んで、気になった本を手にとってみましょう。本との素敵な出会いが待っていると思います。



『校内読書会』

例年は七校合同読書会が開催されていましたが、今年度はコロナ禍に伴い、校内のみで読書会が行われました。

☆テキスト

『星の王子さま』

サン・テグジュペリ著

生徒感想

◆2年1組27番 根岸 巧

星の王子さまをよんだ直後に僕が抱いた感想は、ある小惑星からやってきた王子さまと仲良くなって別れるという、その過程に王子さまが渡ってきた星の話があったというあまり熟考す

るような話ではないというものでした。飛行士の「ぼく」が主人公で話が進んでいきます。ある日「ぼく」がサハラ砂漠に不時着します。一週間分の水しかなく周りには誰も何もないといった状況で、独りで夜を過ごしていました。するとある日、一人の少年と出会います。



彼が題名にある「星の王子さま」だったのです。王子さまの星は家ほどの大きさでした。ある日バラの花とケンカしたことをきっかけに他の星を渡る旅に出たのです。六つもの星を回りまわした。そこで王子さまが目にし、話をした人たちは自分中心で想像力のない人ばかりでした。そして七番目の星、地球に到着したので

この物語の重要なポイントとなるのが、キツネと出会うシーンです。王子さまは遊ぼうと提案するのですが、キツネは仲良くならないと遊べないと言います。キツネによれば「仲良くなる」とは、あるものを他の同じようなものとは違う特別なものと考えること、あるものに対して他よりもずっと時間をかけ、何かを見るにつけそれになることだと言います。それを聞いた王子は、いくらくさんのバラがあるとも、自分が美しいと思ひ精一杯世話を

◆2年1組5番 井野口智也
私たちは今回館林高校のみで読書会を開いた。本来なら邑楽・館林地区の七校で行う予定だったのだが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けて中止となってしまった。私は去年も図書委員で七校合同読書会に参加しており、さまざま

したバラは愛おしく、一番だと悟ったのです。キツネと別れる時になり王子さまは自分がキツネと仲良くなったことに気がきます。別れ際、王子さまは「大切なものは、目に見えない」ということをキツネに教わります。

「大切なものは、目に見えないもの」というキツネの言葉でキツネが伝えたかったことは、「友情」だと僕は思います。王子さまとキツネ、そして「ぼく」と王子さま。それぞれが一緒に時間を過ごすことで友情が芽生えたのだと考えます。そもそも、本当に王子さまはいたのでしょうか。「ぼく」には腹を割って話をすることのできる相手がいませんでした。「王子さま」は砂漠で孤独な「ぼく」が今までの自分と区切りを付けるために頭の中で生み出した人物ではないのかと僕は思います。校内読書会はひとつの小説についてさまざま人と意見を交わすことで、いろいろな発想がでてきて、とても有意義な時間でした。機会があったらまた参加したいです。

まな人達と一つの作品について語り合ったり、他の人の面白い見解を聞いたりするのも楽しかった。今年は開催されずに終わりの私達二年生にとっては去年の読書会が最初で最後になってしまったことがとても残念である。是非、今の一年生達に引き継ぎ図書委員となつて七校合同読書会に参加してほしい。

七校のかわりに催された館林高校内での読書会は短い時間ではあったがとても充実した内容であった。課題図書は「星の王子さま」だった。テレビで特集が組まれるほど有名な作品で「いつか読んでみたい」と思っていたのだが読めずにいたので、今回読書会のおかげで読むことができてとても嬉しかった。内容は個人の意見だが、とても優しいと感じた。砂漠に不時着した飛行士が宇宙のどこからかやってきた小さな王子さまと出会う。王子さまは「ぼく」と出会うまで旅をしておりその途中でキツネと会った。このキツネとの出会いによって「絆」だったり「責任」などを王子さまは知ることになる。最後に王子さまは強い毒を持つヘビに噛まれ自分の星へと帰っていった。その時王子さまの体も消えてしまっており、魂だけが宇宙へと帰っていった。この結末に私は「とても切ないがとても綺麗な終わり方でありSFのような感じがとても良い」としか思っていなかった。し

かし、校内読書会において王子さまは「そもそも『ぼく』による空想の人物であり、まだ大人になりきれていない『ぼく』が大人になるためのキツカケなのかもしれない」という考察がなされた。私はこのことがとても衝撃的だった。そもそも王子さまがいらないという発想をまったくしておらずこのような考え方があったのだと感動したと同時に勉強になった。私は家や部活の電車移動のとき本を読むことが多いのだが、このようなおもしろい発想は思いついたことはない。「物語は自由によりとっていい」とよく言われるが改めて本を読むときは頭を柔らかくしていきたいと思った。

「読書感想文」

夏休みの課題として提出された読書感想文のうち、校内選考を見事勝ち抜き、学校代表として県コンクールに提出された三つの作品をご紹介します。

1年3組8番 大野 連
「怒るを意識する」

書名(著者・出版社)
『なぜ、「怒る」のをやめられないのか』(片田珠美・光文社)

今回、私は「怒り」という感情について書かれた本を読んだ。

初めてこの本を選んだ理由を述べていこうと思う。私はあまり「怒り」という

感情を表に出さないタイプだ。嫌だな、鬱陶しいな、と思ってもその怒りを押し殺し抑制することが多い。私はこれが正しい考え方だと思っていた。だがこの本は、そんな怒りを抑える行為は危険だ、と初めに書かれていた所にとっても興味を引いた。なぜ抑制することは危険なんだろう、そんな疑問からこの本を選ぶことにした。

この本の内容として、主に、怒りを出さないことによる諸々の問題、そしてそれをどのように表現すべきかということが、筆者の考えによって書かれている。

筆者の考えの大前提としてまず「怒り」という感情は決して悪くないとしている。その感情を爆発させることなく表現できる「怒る技術」というものを身に付けることが大切らしい。怒らない「いい人」というイメージを保とうとするあまり、「怒らない技術」を身に付けようとする人が非常に多いとし、そんな人は怒りを溜めこみ、最終的には人間関係や自分自身を傷つけてしまうという。そうならない為に普段から怒りを小出ししていき、怒りを見つめていくことで、怒りを明日生きゆくエネルギーにできる。以上のことが筆者の主張である。

筆者の述べる通り、怒らない人がいい人というイメージがあるという事は事実だと思う。怒りというのはどうしても人を良い気分にはさせないし、なるべく出していきたくない感情だ。実際、私もその内の一人だ。だが怒りも不満も何一つ感じない人はこの世に存在しないだろう。ここで出てくるのが、「いい人症候群」という言葉だ。怒りを出すことは許されないという思い込みから、何があっても怒らないそぶりを見せ続ける姿勢が定着してしまっている。その症候群にかかっている人は、誰にもかき乱されないようなふりをし、いつもにこにこしていいなければならない。

私はここでヒヤッとした。私自身、既にこの症候群になっているのではないかと。怒りの感情を隠すことが良いことだと信じている私に心当たりがある。学校生活の中で、友達や先生の部分や、嫌だなと思ったとしても強く言えないことが多い。それはやはり、関係が壊れるのが嫌だからだとかの理由が大きい。いわば怒りに恐怖していると言える。

あくまで私の見解だが、日本人はこのような考えの人が多く傾向にあると思う。多くの人が自分の中に怒りをしまい込み、それで済ませようとしているのが現状だ。その怒りの示す警告に目を向けられない限り、何の問題の解決にも至らない。怒りの感情が蓄積されていくばかりだ。

怒りは程よく出していくべきだと述べたが、それを

よくない形で出してしまいう人もいる。それが「受動的攻撃」というものだ。これは抑制された怒りがひそかに表現されるということだ。よく用いられる手法として、必要なことを忘れる、しない、遅らせるなどがある。やはり、怒りを蓄積している以上、いずれは発散させなければならぬが、それを表に出さずに表現する人もいるのが現実だ。

確かに、怒りの表現のしかたは多彩にある。怒りの標的である人物と面と向かって、それをぶつける、という方法だけではないのだ。だが、「受動的攻撃」というものは相手に脅威を与える方法として非常に有効なものになってしまふことが分かった。私が一番影響を与える手法だと思うのが「忘れる」という行為だ。この方法は、相手の要求が覚えるほどでもない、という暗黙のメッセージを伝えることになる。忘れるという行為は、本人が無意識なのか意図的なかを判断するのも困難だ。それゆえに、脅威を相手に与える有効な武器になりうるというの理由になる。

けれども、このような陰湿な怒りの表現をしてもいいかなものかと思う。相手に大きな復讐ができて根本にある問題の解消には至らないだろう。やはり相手が友人、家族、職場の関係、誰であつても良好な関係を築くには怒りを直接出すことは非常に大切になる。怒

りの原因になっている不満、要求をきちんと伝える技術も必要になると思う。その為には具体的に何が問題になっているのか整理して分析しなければならぬ。そして怒りを表に出す場合も、適切なタイミングを見極めなければならぬし、そのようなことを一瞬で判断する技術を要するということだ。

私は今後、怒るという行為に対して躊躇をなくしていきたいと思う。この本の筆者の考え方がガラツと変わった。内に溜めすぎず、適度に小出しできるような技術を持ち、気持ちよく生活できるようにしていきたいと思う。

1年4組1番 青木 稜菜
「戦争と平和……」

書名(著者・出版社)
「戦争と平和」(百田尚樹・新潮社)

勝負の世界には残酷な事に「勝ち負け」がある。勝った者は喜び、負けた者は悔しがり、それを見た者は感動やエネルギーを得て元気をもらう。それは、部活動といったスポーツの世界だからの話だと思う。私は戦争といった戦を歴史上の出来事として知らない。でも、戦争の体験記をいくつか読んでみてわかった事は、勝利を掴んだ側ですら、喜んでいない事である。ずっと、罪悪感を感じ失うものが多

い勝利なら私はいらぬ。平和とは、何によって感じるのだろうか。お金、地位、健康によって幸せが満たされればそれは平和なのだろうか。私の祖父が今年の夏休み中に亡くなった。人の「死」に直面したのが初めてだった自分は、現実を受けとめきれずに、ただ怖かった。祖父は、末期癌との闘いに最後まで逃げずに強い精神力で痛みと苦しさを耐えたと祖母から聞いた。コロナ禍の中、高校受験を迎え受験が終わった、祖父と大好きな野球観戦に行こうとしていた夢は叶わなかった。きつと、コロナ禍でなければ日常生活として出来た当たり前の日常生活こそが平和なんだと実感した。それは平穏な日々に感謝する事を忘れるなど祖父からのメッセージを受け取った気もする。

この本の中で、筆者は戦闘機に使われたゼロ戦は、速度と旋回性能は優秀だが、防御力がほとんど皆無のレベルであつたと語っている。七十年以上前の話とは言え腹が立った。もし自分がゼロ戦に乗る立場だったら自分と置きかえて考え「死」を直面に感じた時に鳥肌がたった。不安、逃げたくても出来ないいらぬは、きつと今も昔も変わらないだろう。日本を守る為に命懸けで戦い抜いた日本人の気持ちと歴史を重く受けとめ、戦争は二度とやってはいけないものだと強く思った。戦争の意見を正しく理解し

なければ、私達が望む当たり前の日常生活という平和を持続することは出来ないと感じた。日本人として生まれたからには、過去に起きた過ちから目をそむけずに、正しく後世に受け継がなくてはならない使命があるかもしれない。

日本人ほど戦争に向かない民族はいないと筆者は言うが、その意見には同調する。自分にも当てはまるのが、面倒だからとか人に嫌われたくないといった理由から異なる意見を持つていても、友達の意見に同調してしまふのである。「戦争は嫌だから戦争はしない」と主張するだけで戦争を回避する事が出来るなら、世界から戦争はなくなっているはずなのである。筆者は、協調して和を作る日本人の心は必要だけれども、それだけでは日本を守れないと伝えたいのだと思った。時には、友達の顔色を伺わずダメな事はダメとはっきり意見を言える自己主張出来る人間にならなければと学んだ。自分がやらなくても、誰かが代わりにやるだろうと無意識に争いを避けて通っていた今までの自分と訣別し、明日からは、自分の考えで行動をしようと思う。

だけで終わらせず、過去の戦争に向き合いしっかり戦つべきだと考える。戦争を知らない世代が増えていく中で、その恐ろしさや悲惨さを後世に正しく伝えていく事が、この世界から戦争がなくなる第一歩である気がする。もし、世の中が間違つた道に進みそうになつた時に、私は周囲に同調して楽な道を進むのではなく自分の意見と考えをはっきりと伝える行動が取りたい。

ゼロ戦について語る中で日本は、「悪いことを想定しない」という思考の影響が強かったとされている。確かに、万が一の悪い事を考えてしまふと何も行動できずに終わってしまったであろう。マイナス材料を口にしていたら、もしかしたら戦争は事前に防ぐ事が出来ていたのかもしれない。戦争に勝てると思ひこんでいたことが間違いではあるが、戦争に「勝ち負け」といった勝負の世界はないと思つたのは、後悔と反省の文字である。人にとって「死」というのは、とても辛いものである。今年の夏に祖父という大切な存在を亡くしたばかりだからこそ、家族がどれだけ悲しむのかを知っている。戦争という過ちは二度と起こしてはいけない。この世の中に無駄な命など一つもないのだから。戦争と平和、この本の題となつている二つの単語の意味を私は深く考えさせられた。平和、それは、何気

ない日常に感謝する穏やかな心の中にある気がする。この本を通して戦争を歴史上の出来事ではなくより身近に考えさせられた。そして、この悲しい戦争という出来事を、絶対に忘れてはいけないと実感した。

2年2組25番 高橋 憂我
「高齢者、障害者から考える。支え合いの現状」

書名(著者・出版社)
「なぜ人と人は支え合うのか」「障害」から考える(渡辺一史・筑摩書房)

人と人は支え合うものだとよく聞く。人は一人だけで人生を生き抜くのはもちろん不可能なことだ。実際、私は高校二年生になるまで、多くの人達に助けられてきた。それは皆共通のことだろう。しかし、自分が誰かの支えになつていいると思ふ人はいるだろうか。自分だけ支えてもらい、ほかの人にそれを返してあげられていない人になつていないか。そんな人と人の支え合う関係を高齢者、障害者の人達に置き換えて考えている渡辺一史さんの本を偶然図書館で見つけ、面白そうと思つたのがこの本を読もうと思ったきっかけでした。「人は誰しも齢をとります」と冒頭に書かれていて、それは当たり前のことだが、近年、晩婚化や晩産化によつて、子が成人を過ぎたくらいには、親が六十〜七十代になつていくことが多く、

親の介護問題などが増えてきて、自分には関係のないことと言ってはられない状況になってきている。また、「障害」をもつ人達には、どうしても生活の中に不便さ、また思うように行動ができないというのがあり、やはりそれには人に支えてもらう必要がある。「自分の不十分な所を他の人に補ってもらいながら生活をする」「言葉だけだと聞こえはいいかもしれないが、実際は人にもよるが、凄く大変で、自分の時間に組み込んでやるので、意外に精神的な疲労も出てきやすい。また、ただお世話をするのではなく、相手の気持ちを考えたりしなければならぬので、一人で介護するのはとても大変なのだが、例えば兄弟姉妹は学校などではないなかつたりなどの状況の中では、一人でやらざるを得ない状況が出てきてしまう。それには、介護している人にしか分からない苦労がある。その苦労がいろいろあるが、どれも悪いものが多い。高齢者や障害者の人達に限らず、健常者の人達の付き合いも難しいものだと思ふ。また、世間の人々の中で、なぜか高齢者と障害者を見下す人がいる。しかもその割合は意外に多く、それに関連する問題は多い。その中で、おそらくが有名な事件として、「やまゆり園障害者殺傷事件」というものがある。

私はこの本を読んで知ったのだが、就寝中の障害者の人達を十九名殺害、職員含む二十七名に重軽傷を負わせるという、なんとも残酷な事件が起こってしまった。しかも、「妄信 相模原障害者殺傷事件」という本によって、「障害者は不幸を生むだけ」「日本のために事件を起こした。自分は救世主だ」など供述したらしい。また、犯人は職員から障害者の障害の程度を聞き、その中で重度な人を狙っていて、まるで人の命に順位をつけるかのような行動をしていたことがあったとのこと。

この事件について厳追すると長くなってしまうのでこまめにしよう。私は、なぜ人々の中には自分なりに生きようと努力をしている高齢者、障害者の人達を否定しようとするのか、私はそんな疑問が生まれてくる。私は、「障害者なんて生きてる価値あるのか?」と言っている人に、「では、自分には生きる価値があると誰にも胸を張って言えるのか?」と問うてみたい。もちろん、他人に「お前生きている価値ある?」と言っているようなものだし、そもそも言われたくない言葉だというのは重々承知しているし、まして自分も言いたくないし言われたくもない。でも、その人の人生を見て来たわけでもなく、その人が先天性か後天性のどちらかの障害を持つているだけで差別され、挙げ句にはそんなことを言う人がいるのは私はおかしいと思う。障害者は年齢層が若い人でもいるし、自分がそれを望んで生まれてきたわけではない。持つ人が抱えている悩みや苦痛を考えずに、他や自分と違うからと差別されたり、そんな軽率なことを言ってしまう人は、自分の立場に置き換えて考えるということができていると感じる。

もちろん私は高齢者、障害者の気持ちや考えを十分に理解しているとは言えないので、他の人がこの作文を見れば「何キレイゴト並べてんの?」とか「自分が分かっているつもりなのか?」といったことを思われたり、言われるかもしれない。確かに、自分には高齢者や障害者が思っている気持ちなどを分かってあげられていないとは思わない。なぜなら、私は障害者を持つておらず、持っている人しか分からないものがあるからだ。自分は分かってあげられていないとは思っていない。しかし、そんな自分でも、今の高齢者障害者に対しての接し方はひどいものがあると分かる。人は人と支え合うものでそれは「人」という漢字の由来にさえなっている。前述の文をキレイゴトだと批判されようが、私は自分が思っていることを素直に述べただけだと思っている。

今一度、自分が誰かの支えになってあげられているだろうか、この本はそんなことを深く考えさせてくれる本だと私は感じた。

新着任者に聞く読書体験

例年、新着任者座談会を開催し、先生方の読書体験を話していただいていたが、今年にはコロナ禍に伴い、実施を見送りました。その代替として、読書体験をリーフレットにまとめ、生徒へと配布しました。以下はその抜粋です。

Q 今まで読んだ本の中で心に残っている本は何ですか? また、その本がなぜ心に残ったのかを教えてください!



森 義仁
教頭

『不思議な少年』（マーク・トウェイン）

図書便り六月一日号に掲載。『科学の方法』（中谷宇吉郎）非常に古い本ですが、科学・学術という点について興味なところをすつきりさせてくれます。

『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』（村上春樹）

長編で二度読みたくなる本はそれほど多くはない気がします。



坂井 雄一
先生

『ルウエイの森』（村上春樹）大学生の時に、先輩に勧められて読んだ本です。ストー

リーに激しい変化があるわけではないけれど、不思議に動いていくあのふわっとした感覚が心に残っています。ブックレビューを見てみると評価は極端に分かれていますが、その分だけ注目されているということでしょう。個人的には好きな作品です。十年以上読んでいないので、今改めて読み返せば見方も変わるのかなあと、今ここに書きながら思う次第です。



前原 一輝
先生

『一九八四年』（ジョージ・オーウェル）

大学の講義（社会学）をきっかけに読みました。国家による厳しい思想統制や監視が行われ、主人公の思想が徐々に「洗脳」されていく。フィクションですがある程度の歴史的事実を踏まえているように感じられます。とてもフィクションとは思えないくらい、リアルで恐ろしく、現代社会とのつながりを考えさせられてしまう。という点で強烈に印象に残っています。



鹿田 均
先生

『新史太閤記』（司馬遼太郎）単純な「秀吉の出世物語」でなく秀吉の人物描写が巧



清水 昇
先生

い。秀吉の水攻めや兵糧攻めは当時は画期的で、勝つ条件が揃ってから相手を降参させる方法をとる。『悪魔の手毬唄』（横溝正史）この作家は殺人の動機を巧く書く。

『チーズはどこへ消えた?』（スペンサー・ジョンソン）

原因はわからないけど、気づいたら自分の置かれている環境がガラッと変わってしまったという経験はありませんか? AIの普及、新型ウイルス、etc... この絶え間なく起こる変化に正しく対応していくには、いったいどうすればいいのでしょうか。人間関係、恋愛、仕事、友人、家族といったあらゆる変化へ対応するヒントを示してくれるのが、全世界で累計2400万部を超えるベストセラー『チーズはどこへ消えた?』です。今後の人生の参考に是非一度...。



長島 遥佳
先生

『モモ』: 初めての、本の世界に入る。という経験をした本です! 内容も面白く、生き方に考えさせられました!

『羊と鋼の森』：描写がとて
も美しく、主人公の葛藤と
周囲の人との出会いの中か
ら得られるものに心温まり
ます！

『博士の愛した数式』：難し
い数式ではなく、博士、家
政婦とその息子との日常を
描いた物語です。

単なる式変形だが、そこに
意味を込める所がとても良
い！さて、24と言えは……

『無限』に魅入られた天才
数学者たち：『無限』に
最後まで突き詰める数学者
の壮絶人生！感謝、驚愕さ
まざま。



本田 弘二
事務長

『官僚たちの夏』（城山三郎）
日本の高度経済成長を推進
した通産官僚たちの生き様
が描かれている。ミスター
通産省の異名を持つ主人公
の『国家の経済政策は政財
界の思惑や利害に左右され
てはならない』自分たちは
『国家に雇われているので
あって大臣に雇われている
わけではない』といった信
念、一方で雑で細かいこ
とを面倒くさがり性格、故
に周りは敵ばかりであるが
最後は事務次官に就任する。
今はなき泥臭く、厚かまし
く恐いもの知らずの旧制二
高出身官僚の生き様が心に
残って離れません。

図書館主催講演会

「ちよつと昔の館林」

講師 中澤 中先生

十二月四日（金）第二学
期期末考査最終日、中澤中
先生を講師にお迎えして、
図書館主催の講演会を視聴
覚室で開催しました。講演
内容は次のとおりです。



資料①「太田中学校邑楽分校」

館林高等学校は、来年度
で創立百周年を迎えます。
この大きな節目にあたり、
館林高等学校の成り立ちな
どについて、講演をさせて
いただきました。

まず、館林高等学校の前
身にあたる、「太田中学校邑
楽分校」の写真です（資料
①）。場所は、「群馬県邑楽
郡館林町稲荷郭」、館林城の
一角です。

明治三十年代に、館林に
は小学校がありました。が、
中学校はありませんでした。

そのため、「館林の地に中学
校がほしい」という地元の
人々の熱望により、明治三
十四年四月一日に県立中学
校である「邑楽分校」が創
立されました。暫定的に館
林町代宿にある「五寶寺」
という新義真言宗の寺院の
本堂が仮校舎となり、翌明
治三十五年四月三十日に、
「稲荷郭」に新校舎が落成
し、移転となりました。

ところが、「太田中学校
邑楽分校」は、創立からわ
ずか十一年後の明治四十五
年三月三十一日をもって廃
止となつてしまひ、そこに
代わりとして「館林農学校」
が設立されました。なぜ
「邑楽分校」は廃止となつ
てしまったのでしょうか。

明治四十四年に、「学校整
理案」というものが県議会
に提出されました。その内
容は、次のようなものでし
た。

○当時群馬県には、分校
が数多くあった。
○生徒の教育上、必要な
設備が整っていない。

○群馬は農業県といいな
がらも、「吾妻農学校」（現
吾妻中等高等学校）一校しか
農学校がなく、東毛地方に
も農学校が必要である。

また、明治四十三年八月
の台風により関東地方で発
生した洪水も、「邑楽分校」
廃止の大きな要因となりま
した。最も被害の大きかつ
た群馬県の死者は二八三名、
行方不明二七名、家屋全壊
流出一二四九戸に上り、利
根川右岸の決壊により氾濫
流は埼玉県を縦断し、東京

を襲いました。この時の被
害は、館林一帯に住む者た
ちにとってかなり経済的に
打撃となり、子息を進学さ
せることができる経済的余
裕を持った家庭が激減して
しまったのです。

以上のような理由により、
当時あった分校のいくつか
を整理することとなり、明
治四十五年三月三十一日を
もって、「太田中学校邑楽分
校」は廃止されてしまつた
のです。

「邑楽分校」が廃校になつ
てしまったことは、「邑楽分
校」OBをはじめ館林に住
む人たちにとって、大きな
衝撃でした。そのため、館
林の地に中学校を再興しよ
うという運動が起こりまし
た。そのメンバーは、「邑楽
分校」OBによる親睦団体
であった「同友会」（母校再
興運動を起こしてからは
「館中同友会」と改称）でし
た。大正九年一月に館林市
内にある「魚惣」という料
亭で行われた新年恒例会に
おいて、母校再興が話し合
われました。この「館中同
友会」の活動を受けて、そ
の年の十一月の県議会に
「邑楽郡に中学校を設立す
る建議案」が提出、可決さ
れ、大正十年四月に、「群馬
県立館林中学校」が設立さ
れることとなりました。

「館林中学校」として再興
はしたものの、当時「館林
中学校」のための施設・設
備は一切ありません。その
ため、以前「邑楽分校」で
あった「館林農学校」の一
室を間借りしてのスタート



となりましたが、大正十一
年に「邑楽郡六郷村大字小
桑原一二四一番地」に新校
舎が完成し、六月八日に移
転しました。これが、現在
の「館林高等学校」の敷地
です（資料②）。

「館林中学校」が、小桑原
に移転後、「館林農学校」は、
大正十二年に大泉へ移転し
ました。当時は小泉町であつ
たので、「小泉農学校」とな
りました。これが現在の
「大泉高等学校」です。

「館林農学校」が小泉町に
移転後、残された「稲荷郭」
には、「館林尋常高等小学
校」（現館林市立第一小学校）
に併設されていた「館林町
立高等女学校」が県に移管
され、「群馬県立館林高等女
学校」となり、引き継ぐこ
とになりました。もちろん
これが、現在の「館林女子
高等学校」です。「館林町稲
荷郭」は、「五寶寺」ととも
に、この地域の教育の原点
の地であることがわかります。
ただ、町民の「館中同友会」
の方々の、館林地区の子供
たちへの教育に対する熱意
も感じとらえてもらえれば
と思います。



資料②「館林中学校」



人気貸出図書

順位	書 名	利用者数
1	ようこそ実力至上主義の教室へ シリーズ (衣笠彰梧著)	83
2	お隣の天使様にいつの間にか駄目人間にされていた件 (佐伯さん著)	23
3	魔女の旅々 シリーズ (白石定規著)	13
4	ソードアート・オンライン 24 (川原礫著)	13
5	Re: ゼロから始める異世界生活 11 (長月達平著)	12
6	星の王子さま 改版 岩波少年文庫 2010 (サン＝テグジュペリ著)	10
7	やっかいな放射能と向き合っ暮らしていくための基礎知識 (田崎晴明著)	6
	はたらく細胞 1 (清水茜著)	6
	ロクでなし魔術講師と禁忌教典 16 (羊太郎著)	6
	この素晴らしい世界に祝福を! 17 (暁なつめ著)	6

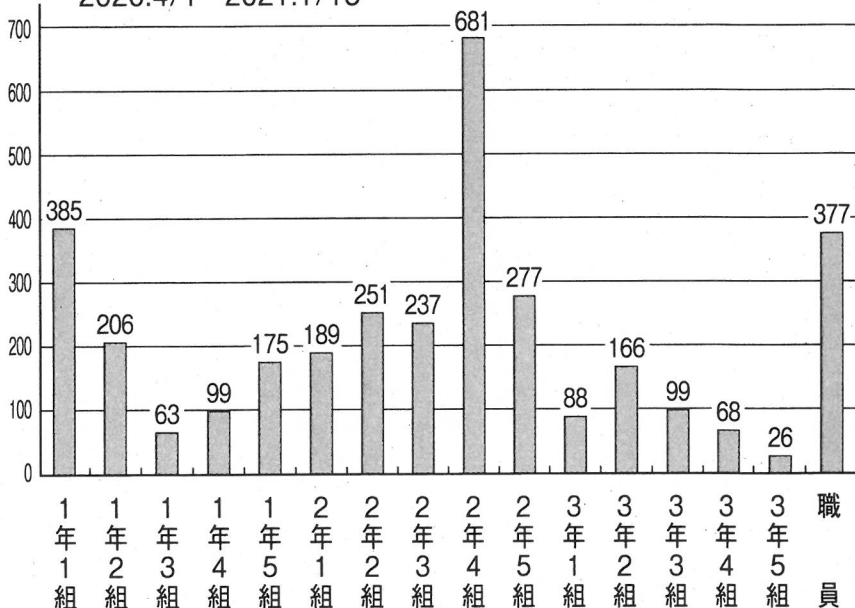
貸出利用冊数上位者

順位	クラス	氏 名	利用数
1	2-4	神山 耀慶	222
2	1-1	佐々木 蒼宙	130
3	2-4	須藤 侑哉	105
4	1-2	曾原 煌暉	82
5	2-4	増田 優希	72
6	3-2	島田 智央	65
7	2-4	福田 健仁	62
8	2-2	和田晋太郎	55
9	3-4	福田 烈	53
10	1-1	栗原 聡汰	51

クラス別貸出冊数 本年度総数 3,387 冊

(昨年度総数 4,144 冊)

2020.4/1~2021.1/15



図書委員回顧録

3年2組21番 島田 智央

私が図書委員としての活動を振り返り感じたことは、第一に「楽しかった」ということです。そもそも、私が図書委員会に入った大きな理由に自分が読書好きだったことがあり、委員会活動の間に面白い本でも見つければいいな、と考え図書委員になりました。

私は一年次と三年次の二回、図書委員を務めました。が、一年次に委員会に入った当初は委員会の活動自体にはあまり関心がありませんでした。しかし、そんな私にも丁寧に指導してくださった司書の玉井先生のおかげで、なんとか仕事をこなしていくことができました。一年間、最後まで面倒を見ていただき、感謝の念に堪えません。

ようやく委員会の仕事にも興味が出てきた私は、二年次でも図書委員に立候補しましたが、残念ながら委員にはなれませんでした。しかし、本好きは変わらなかった。高頻度で図書室を訪れていました。玉井先生とお話させていただく機会も多くあり、校外の図書館から本を取り寄せていただくなど、本との関わりはまったく薄らぎませんでした。

そして三年次は再び図書委員会に参加することができました。しかし、コロナ禍のため活動制限を余儀なくされました。が、その後の委員会では講演会や図書館の書籍紹介を担当し、決して多くはなかったものの、本との関わりを作った

いくことができました。これまで振り返って、私にとって何が「楽しかった」のかを考えると、本を読むことができたというところが、その一つの答えとして挙げられると思います。私は本の中では歴史書をよく読んでいました。しかし、読む内に関連する内容の本を読むに限りなく、その結果、歴史に限らず地理・民俗・文化などの本や、その時代に書かれた小説を読み始めるようになりました。連鎖が重なり、読む本のレパートリーを大きく増やしたのです。さらに、さまざまな分野の本を読むようになって得た知識は自分に新しい視点を与えてくれました。そのため今までに読んだ本も以前とは異なる読み方ができ、そのこともまた本の面白さの一つであるように感じました。

本の表紙というのは、自分にとって未知の世界への扉のように思えます。そして、本というものは読む人に学びの機会を、書かれてある内容以上に与えてくれるものであることに気づけたことが、図書委員を務めて得た最大の収穫だったと感じました。

近年では、IT化の進行で、小説などであってスマホやタブレットで読むという人が増えてきていると聞きます。しかし、学校図書館はこれからも自分の手で本を取り、ページをめくって、紙の本にしかない味わいのものだと思います。